

《論文》

自由学園のカリキュラムからみる 教育内容についての考察 (2) ——創立期 (大正期) における科外教育を中心として——

福原 充

I. はじめに

本研究の目的は、自由学園 (1921 年創立) におけるカリキュラム、特に創立期 (大正期) の科外教育に焦点をあてながら、新教育運動における新学校としての自由学園の教育の特徴を改めて検討し、位置づけることである。

1934 年 5 月 12 日に発行された『教育週報』には、自由学園の創立者である羽仁吉一・もと子夫妻 (以下、羽仁夫妻) が「自由学園の教育が殆ど理想の飽和点にまで達した」ため、その延長拡大として新しい教育機関を創る予定であること等が掲載されている⁽¹⁾。

自由学園教育の「飽和点」とは、羽仁もと子 (以下、もと子) が 1932 年に新教育協会の日本代表の一人としてニースの世界新教育会議で発表した、羽仁夫妻が理想とする教育機関の役割を指していると考えられる。福原 (2014) でも述べているように、それは、新しい社会をつくることを目的とした、社会改造を展開する新教育学校の重要性を訴えたものであった⁽²⁾。

自由学園は羽仁夫妻が発行していた婦人雑誌である『婦人之友』(1908 年創刊) やその読者団体である「友の会」(1927 年結成) と「相互補完的」⁽³⁾な関係にあり、同誌を中心に展開された「共同体形成型」⁽⁴⁾といわれる性格の運動の一端を担った新学校である。特に新学校の中では、社会活動と連関しながら教育活動を展開した女子教育機関として位置付けられている。しかし、その一方で新学校における自由学園の教育内容については、

中野（1968）に代表されるように「自労自活的生活」を基本とすることや「二十六名を五つの家族形態に分け、すべての日常生活を小集団で自律的に管理、展開していく方針を実行していった。」⁽⁵⁾等の科外教育活動における言及にとどまっている。つまり、新学校としての特徴を含め、具体的な科目の内容や各科目と科外教育との有機的な連関も含めた総体としての自由学園の教育活動についての検討は、新教育運動の研究の中ではほとんどされてこなかったといえよう。

自由学園の教育内容と羽仁夫妻の関連団体について、その連関性も含めて検討した代表的な研究としては、羽仁もと子の生涯を追いながらその思想等を検討した斉藤（1988）の研究がある⁽⁶⁾。斉藤が指摘する「自由学園の教育は、すべての学科が生活と一体になるように配慮されていた」⁽⁷⁾といった教育構造に関する考察や、中野（1968）と同様に1928年の卒業生に注視してはいるが、「自由学園の方針のもとに教育されてきた生徒たちの卒業後の活動こそ、学園の教育の真価を問う試金石である」といった点は筆者も同じ見解である⁽⁸⁾。

しかし、斉藤の研究はもと子の思想等の研究に重点が置かれており、新教育運動のからの視点、特に教師や生徒達の自由学園教育に関する理解や学科目と科外教育の連関についての検討等については、中野（1968）や他の先行研究と同様に課題が残ったままである。また、1928年以前にも卒業生は存在していたのであり、羽仁夫妻の卒業生へのまなざしや卒業生自身の意識等が自由学園の変遷のなかでどのように積み重なって「飽和点」にまで達したのかという点についても課題が残されている。

近年においては、自由学園小学校（1927年設立：現自由学園初等部）のカリキュラムに触れつつ、1941年、42年の自由学園初等部参観者名簿（礼状含む）の記録から国民学校のモデル校として注目された同校を検討した菅原（2016）の研究成果がある⁽⁹⁾。

菅原（2016）は、戦時下の自由学園、特にこれまでほとんど検討されてこなかった初等部の教育内容に注目しており、同校が「国民学校発祥の地」

とも評されていたことを指摘している点は興味深い。しかし、①創立期ではなく、昭和期の初等部に重点が置かれていること②新教育運動（大正自由教育運動）について、「〔知育偏重・注入主義からの脱却〕の先にある達成目標が、大正自由教育運動においては、子ども一人ひとりの個性・自発性の尊重であった」⁽¹⁰⁾と捉えており、自由学園も同様に位置づけていると考えられる点で筆者の見解とは異なる。新教育運動の達成目標は子ども一人ひとりの個性・自発性の尊重だけでなく、自由学園の場合、その達成目標は教育機関も含めて展開していく社会改造であったと筆者は考えている。

以上の点を踏まえつつ、本稿では福原（2019）が指摘した創立期（大正期）の自由学園のカリキュラム（学科目）の検討内容に基づきながら、改めて自由学園の科外教育を検討することで、大正期における自由学園の総体としての教育内容の特徴を位置づけることを目的とする⁽¹¹⁾。

資料としては、大正期に自由学園の教育内容を関係者に伝えるため、同校が発刊していた『自由学園月報』（発行期間：1924年9月～1925年9月）や大正期に配布されていた『自由学園要覧』等を使用する。関係者に配布する自由学園内部の資料だけでなく、外部に配布されていた『要覧』を用いることで、自由学園教育の特徴を立体的に描くことを目指す。

Ⅱ. 自由学園における「卒業生」の意識とその役割

（1）自由学園高等科第一回生決議文に関する考察

自由学園は各種学校（女子の中等・高等教育機関）としてスタートしたが、その創立期の学科目は当時の高等女学校令と同程度の科目と時間数が設定されており、羽仁夫妻は学科目における学びを「知的学術的方面の教育」⁽¹²⁾として位置づけていた。一方で、各学科目は羽仁夫妻が創立前より展開していた社会活動を土台にして考えた内容になっていたため、当時の良妻賢母とは異なる新しい「婦人」の育成を目指すといった特徴があった。

各学科目は実生活、つまり社会と結びつくことが重視されていた。自由学園に在学する生徒達は創立時より職業教育の一環ということもあって、

在学中に『婦人之友』に自分が学んだ内容等を掲載できる機会があり、自分達の学びを学外に向けて発信し、研究できる場が用意されていた。また、これらの「場」は卒業生にも同様に提供されていたため、自由学園の生徒は卒業後も含め、継続して活動できる環境があった⁽¹³⁾。創立期の科外教育を検討する上でも、また卒業生の役割を検討する上でも、まずは創立期と創立 10 周年の卒業生の意識を比較しながら羽仁夫妻が考えていた卒業生の役割について確認したい。

一つの手がかりとなるのが、1923 年 4 月 18 日、自由学園で初めて実施された第一回卒業式（高等科）である。入学時は 59 名いた生徒も、卒業生として式に参加できたのは、35 名であった⁽¹⁴⁾。2 年間の高等科教育を受けた生徒達は、自分たちで以下の決議文を作成し、代表者が卒業式において関係者の前で読み上げたという⁽¹⁵⁾。

自由学園高等科第一回生として、私等は離れがたい思ひのうちに、この学園から大きな世界に自分等の直接の生活に移さねばならなくなりました。すべての生命が様々な微妙な香気を交へて渦巻いた春から、今統一の夏に急ぎつゝある時に、私等は学び得たすべてのものを、我等の社会生活の様々な自覚の上に結びつけて、未来の目的の永久の進歩のために、これらの決議を一人一人の心の上に責任を以て誓ひたいと思ひます。

- 一、私等の二ヶ年の学園生活の苦しみは、尊い経験を過去に残し、光を未来に見出し得たことを信じて、我等の社会生活を、より前進的なもの、より信仰的なものにしてゆきたいと思ひます。
- 一、私等の学園生活が真実の自由を得るための永続的な勉強の基礎であったことを思ひ、不断の注意と努力を以て、日常生活のうちから生ずる様々な人間的の感情を各自の人格に照らし合せて、常に人間としてのよきうるほひを保ち、我等の生活を色彩の多い研究的なものにしてゆきたいと思ひます。

一、人間としての良心の誕生のために、女性としての創造的職業を見出し、自分等の社会生活の様式と内容を各自の個性に応じて創造し、独立的なものにする苦しみを覚悟したいと思ひます。

一、我等は相互に学びあった生活から、すべての個性の豊富さと、極めて敏感に影響しあひ支へあふ繊細な尊さを知りました。我等は常に心を細かくして、相互の個性を、特に質素な個性の上にも十分な感謝と愛をもつことによって、この人生を喜び深いやはらかなものとしてゆきたいと思ひます。

一、団体は人間の単なる寄り合ひではなく、個人を生命とする多くの友情の結合であることを、学園生活の経験から信じて、個性の完成のために、世界の進歩のために、私等の団結を更に力強いものにすることは勿論、この大きい社会をよき団体としてゆきたいと思ひます。

一、我等は多くの苦しみと深い喜びの機会を学園から受けたことの尋常でないことを思ひます。愛すべき学園によって、我等はなほ永久の進歩を助けて戴けると存じます。我等も学園のよき先駆者として努力することを決心して居ります。

これらの決議が決して単なる理想や観念にとゞまらず、一步一步自分の成長を生むものとして努力し得ることを、ニヶ年の学園生活から十分に教へられている責任を全うしたいと思ひます。

大正十二年四月十八日

自由学園高等科第一回卒業生一同

『婦人之友』の誌上に掲載されたこの決議文からもわかるように、新しい婦人の育成を目指して創立した自由学園の教育が重視していたことは、創立当初から生徒達が卒業した後の生活のあり方であった。また、この決議文は生徒達自身が「卒業生一同」としてまとめたものであるとされているため、卒業生（生徒達）が自由学園の教育をどのように受け止めていた

のかを知ることができる重要な史料であるといえる。

自由学園が創立して初めての卒業生となる高等科第一回生が掲げた6項目は、どれも当時の自由学園教育の要点を考えるうえで重要な点を提示している。特に重要なのは「女性としての創造的職業」を「自分等の社会生活と各自の個性に応じて創造し、独立的なものとする」という点と、個人が友情による結合によって一つの「団体」となるといった、自由学園生活での経験を「大きい社会をよき団体」にしていけることに活かし、活動していくことを掲げた点である。

つまり、この2点に代表される要素が、自由学園教育における新しい時代に生きる理想の女性像であり、同時にそれを実現するために必要な力として考えられていたのである。

1924年12月10日の『自由学園月報』には、回答のあった高等科第一回卒業生(29名)と第二回卒業生(10名)が記した「卒業生近況」が掲載されている。この記事の文章から卒業後の彼女たちの生活意識の一端を確認してみよう。

高等科第一回卒業生が記した内容を確認すると、時々、一緒に卒業した自由学園の友人に会い、「家庭の希望や感想を語り、自分等の周りに学園をつくらうと努めて居ります。今の私にとっては、それが唯一の楽しみであり又進歩でございます」といった記述や、「今まで通りの習慣や形式にとらはれたくない為に、可成の戦をして居ります。」という報告、「いつも、学園の卒業生らしいものになりたいとコツコツ努力しています」等⁽¹⁶⁾、社会活動について具体的な計画を記した記述はないものの、卒業後、一年半経った時点においても、決議文で表明した内容を意識して生活している様子を確認することができる⁽¹⁷⁾。

先に述べたように、卒業生はそのまま婦人之友社や自由学園で働くこともできた。また、この時期は卒業生有志として主に英語や理科の勉強をするための「研究科」で更に一年間勉強するといったこともできた⁽¹⁸⁾。「研究科」に進んだ卒業生たちは、自分たちの勉強の傍ら、本科の理科や料理、

手芸体操等の授業や婦人之友社関係の仕事をしていたという。

その他にも、「学園で開かれる音楽会に、私も皆様と一しょにするやうになりましたから、これを機会に又一生懸命に努力したいと思って居ります。」といった記述や、第二回卒業生の「学校で開かれる会にさへ出席出来にくい」といった現状に対する不満を述べた記述等から、研究科に在籍する・しないに関わらず、卒業生自身が自由学園で実施される活動に参加したいという希望を持っており、尚且つ参加できる環境があったということがわかる⁽¹⁹⁾。

在学生であるかに関係なく、イベントや学ぶ機会に参加できる環境をつくることは羽仁夫妻が自由学園の創立を発表した時期からも確認することができるため、自由学園教育の特徴の一つであるといえる⁽²⁰⁾。

『婦人之友』に掲載された第一回卒業式の記事の最後は、各方面に散っていく、あるいは継続して「研究科」に所属する卒業生について、彼女達の活動が「清められ栄えさせられて行くことを、私共は待って居ります」⁽²¹⁾という文章で締めくくられている。

この第一回卒業生には、社会活動についての具体的なビジョンや社会的な課題に対して学年規模で活動する機会があったわけではない。しかし、決議文や「卒業生近況」に掲載された内容からもわかるように、自分たちが社会という団体をよいものにするために一つの集団として活動していくことを自覚していた。それはまた同時に、継続して羽仁夫妻の事業に関わるということでもあり、卒業生はそのことも意識していたことがわかる。

このことから、自由学園の創立目的とその教育内容は、第一回卒業生の時から生徒達に受け止められ、ある程度自覚化されていたと考えることができる。また、第二回の卒業生の時には、全校で実施した関東大震災の震災罹災者救援活動といった、実際に社会で活動する機会があったことも忘れてはならない。毎年実施されていた卒業生を中心とする「卒業勉強」は、第三回卒業生の『我が住む町』⁽²²⁾に代表されるように、関東大震災以降、自分達の学びを卒業後、どのように活かすのかが特に重要なテーマになっ

ていった。

(2) 「二十一年生」の卒業と創立 10 周年の記念事業

1928 年の卒業生は自由学園にとって、特別な意味を持っていた。それは、1921 年の創立時に本科生として入学し、自由学園における本科・高等科の 7 年間教育を初めて終える生徒たちが卒業する年だったからである。彼女達は 1921 年創立の年に入学したことを記念して「二十一年生」と自由学園内で呼ばれた⁽²³⁾。

この二十一年生は卒業式が近づくにつれ、「卒業後も組がばらばらになることなく、いつまでもこの団体に連なる者として一つの仕事を皆でしてゆきたいと強く願い、式の数日前に、既に学校の一隅で小さな店をはじめていた消費組合の仕事を、学園に関係するすべての家庭にまでひろげ経営して行く」⁽²⁴⁾ 決心をしたという。「一卒業生の仕事のはじまり」⁽²⁵⁾ として位置付けられている彼女らの活動は、もと子のニースにおける講演でも以下のように紹介されている⁽²⁶⁾。

千九百二十八年四月、はじめの子供らが卒業しました。人数の少い彼等が一人々々旧世界の中に隠されてしまったら、学校でつくる新社会は、いつまで経っても学校の窓を遠くは出ないものになります。新社会をつくらうとする学校においては、志のある卒業生が一団になって、社会に働きかけて行かなくてはならない譯です。一略一彼等は、その親しい同志と共に、学校と同じ意味の社会を、一般社会に打建てるべく奮闘する決心をしたことを、その卒業式の前々日突然私たちに報告しました。その家々の事情にも許されて一団となった人々は十七人でした。

この消費組合から始まった卒業生の活動は、農村セツルメント、工芸研究所といったように毎年その卒業生毎に新しい事業が企画・実施される

きっかけにもなった。創立 10 年を迎えた際の事業として企画されたのも、卒業生 40 名あまりが「自由学園十年間の生活と勉強によって出来つゝある、今の日本としての能率的合理的な日常生活法を基礎」として、新しい生活スタイルを発信していくことを目的とした活動であった。そして、この活動が『家庭生活合理化展覧会』だったのである⁽²⁷⁾。

この展覧会の内容を一冊にまとめた『婦人之友 別冊 家庭生活合理化』には、「全国友の会主催」⁽²⁸⁾と記載されているが、もと子の講演内容にもある通り、一つの社会事業としてだけではなく卒業生の活動、つまり自由学園で学んだことの成果を発表・発信する活動の一つとして同展覧会が位置づけられていたことが重要である。

これらの活動は、「卒業生の自然に選んだ道」とはされているが、「婦人がその力を、直接に社会に献ずることは、社会のためにも、婦人自身の発達のためにも、実に大切なことです。婦人が家庭生活と社会生活とを、各自適当なる分量において、自分の一身に両立させるためには、特に考へられたよい組合が必要」といった、もと子のみならず、羽仁夫妻としての自由学園教育の目的を具体化した活動でもあったのである⁽²⁹⁾。

事実、もと子は「我々の雑誌『婦人之友』の愛読者が、自由学園及び卒業生の活動に刺激されて、日本各地に『友の会』と称する団体を造るやうになりました。学校と共に『思想しつゝ生活しつゝ祈りつゝ』といふ標語を用ひ、T・L・Pといっています。これも学校内の働きが、社会に反響してゆく一例だと思ひます」⁽³⁰⁾として、自由学園という教育機関とその卒業生の活動が社会へ反響していく姿を一つの成果として述べている。

羽仁吉一（以下、吉一）も「卒業後社会に出る時の準備」として学校を捉えるのではなく、学校そのものが「厳然たる一個の社会」として行動することの重要性を指摘している⁽³¹⁾。

一つの教育機関を軸とし、そこで学んだ生徒達が個人としてだけではなく、団体として卒業後、他と連関しながら社会的な活動を通して、新しい社会をつくるために働きかけていくといった教育機関のかたちこそ、羽仁

夫妻が目指した新教育学校の姿であり、「社会改造の最も適確な正道」⁽³²⁾であった。

羽仁夫妻のこれらの主張の背景には、「社会の情勢の強さにひきづられて教育家には何も出来ないとおっしゃるのですか。私はそれに反対です。そんなら教育家をやめて事務家になったらいいでせう」といった、当時の日本の新教育（自由教育）に対する批判的な視点も関係していると考えられる⁽³³⁾。社会改造を展開する新学校の主張は、当時の新教育に対する羽仁夫妻なりの答えであったといえよう。

以上のように、自由学園における「卒業生」の意識とその役割は、社会をよりよくするために、婦人が個人ではなく、団体として協力しながら社会活動を展開することを目指したものであるという意味において一貫していたことがわかる。そのため、自由学園のカリキュラムも、この一貫した目的に基づいて構成されていたと考える必要がある。

ところで、卒業後の社会的な活動も視野にいれた教育機関を構想したのは、自由学園だけではない。例えば成瀬仁蔵の日本女子大学校でも同様の活動を確認できる。成瀬は第一回生の卒業を迎える 1904 年の正月に卒業後も女学生たちが生涯にわたって自発的な活動をし、自身を向上させることを願って、自らの考えを「桜楓樹」といった樹木を描くことで、図式化したとされる。この成瀬の桜楓樹を基にして「一般の同窓会とは質を異にする、強力な活動体」として同年の 4 月に設立したのが桜楓会である⁽³⁴⁾。

成瀬がこのような構想をした時、羽仁夫妻はまだ自由学園を創立してはいない。しかし、自分達が編集していた同時期の『家庭之友』時代にみられる言説やもと子が参加した「明治母の会」の活動とその展開を考えると、女性が社会的な活動をするための組織づくりに対する意識は、当時のキリスト教関係者の中において共通したものであったのかもしれない⁽³⁵⁾。

一方で、自由学園は当時（大正期）の日本女子大学と比べ、より実生活に結び付いた教育活動を展開していたようである。大正期の日本女子大学の卒業生を対象とした調査報告では、当時の同大学について「環境に恵ま

れすぎた方々の学校であった為、消極的な点、実社会の厳しさの理解に欠ける点があったように思う」、「実社会、実生活からほど遠いふんわりした空気に浸らせて頂いたことはありがたかったと思うが、結婚生活に入ってもさっぱり役に立たず、羽仁もと子さんの友の会、婦人の友等によって、生活の仕方を教えられました」といった意見があり、実社会からの遊離が同大学の問題点の一つとされていた⁽³⁶⁾。一部の卒業生の意見ではあるが、日本女子大学卒業生のこの指摘は、大正期における両校の差異を表したもののといえるのかもしれない。

もう一つ指摘しておかなければならないことは、吉一の指摘にもあったように、羽仁夫妻の事業や卒業生の事業は自由学園教育と一体化して展開された点である。例えば、1927年にもと子の著作集の刊行が『婦人之友』の誌上で発表されると、「生徒たちも自分の家の近所の本屋さんに、宣伝をたのみに行った」等⁽³⁷⁾の記述を確認することができ、一見すると教育活動とは関係ないと思われる活動に生徒達が協力していたことがわかる。教育機関である一方で、社会活動（運動）と「一体」となる切れ目のない構造それ自体が、戦前・戦後も含め、自由学園にとってどのような意味を持つものになったのかということは、今後検討する必要があるだろう。

Ⅲ. 自由学園における科外教育の特徴

(1) 「自由学園の生活」からみる「学生委員」の仕組みとその役割

自由学園が創立期から卒業生に期待していた役割を確認するとともに、「卒業勉強」等と羽仁夫妻が目指した社会改造運動との関係性についてこれまで検討してきた。次に実際に創立期（大正期）の自由学園で実施されていた教育内容を確認する。特に羽仁夫妻が学科目とは別に自由学園の教育において重視していた科外教育、「学生委員」と「家族」の仕組みに注目する。

自由学園の教育の中で生徒達の自治を目的とした、一つの組の活動である「家族」の仕組みや学校の運営を自分達で管理する委員会の存在について

ては、これまでの先行研究でも取り上げられてきた。しかし、委員会は創立後一貫して同じかたちを維持していたわけではないし、創立後に語られた委員会の位置づけについてもこれまでしっかりと確認されてきたわけではない。

そこで、自由学園にとって初めてのパンフレット形式の『要覧』であった『自由学園要覧』（1925年発行）に注目する。同史料は科外教育も含めた大正期の自由学園教育の全体像を体系的に述べており、創立期のカリキュラム内容に関する史料が少ない同学園にとっては貴重な史料である。『自由学園要覧』では、「一、自由学園の学科」、「二、自由学園の生活」、「三、魂の成長のために」といった項目を設けて自由学園の教育を説明している。特に、同史料に記載されている「自由学園の生活」⁽³⁸⁾には、委員会の役割が記されており、自由学園教育にとって、「学生委員」は科外教育の要として位置づいていたことがわかる。

羽仁夫妻はこの『要覧』において、「本当の学校といふ団体には、その団体のもつ実生活」がなくてはならず、「学科より得る知識と、それを応用しつゝ生きて行く実生活と、その二つの力で本当の自分といふものが成長して行く筈」⁽³⁹⁾であると述べている。

「学生委員」とはまさにこの実生活の部分を担うものであり、「自由学園といふ団体の生活は、各級から順番に選んだ十八人の学生委員（本科各二人づゝ高等科各四人づゝ）によって支配されています」⁽⁴⁰⁾と説明している。

任期は「大概二ヶ月」とし、委員は委員長（高等科2年生から選出）、副委員長（高等科1年の委員の中から選出）、実務、用度、会計⁽⁴¹⁾からなり、各委員の主任は高等科の生徒が担当し、本科の生徒はこの3つの委員それぞれに配置される。そして、高等科の生徒は本科の生徒とは異なり、委員長や副委員長、各委員の主任といったように「団体の支配者の位置に立つ」⁽⁴²⁾ことになる。「学生委員」は週一回、委員会を開いて自由学園全体の運営について様々なことを議論する。

また、全校生徒を3部に分け、本科の1～3年を1部、本科4～5年と予

科を2部、高等科1～2年を3部とし、この3部も1週に1度それぞれに集まって自分達の部の生活を報告する部会を開く。この部会は「その一週間に於ける出欠席の報告、病気で欠席している人の容体、学課のすゝみ方勉強の仕方、実務（分担している校内の用事）、個人または組から出るさまざまな注意や提案等」⁽⁴³⁾を相談し合うことその他、各部にいる委員が委員会であったことを報告したり、部会から委員会に提出したい内容があれば委員に頼むといったことが行われる。さらに、毎月一回ずつ3つの部を一つにした全校での報告会を開き、そこでは全体に関わる内容を皆で考える。「学生委員」はこの全体の委員とともに、この部会の委員も担い、「部会⇄委員会」へのやりとりと全体報告会を含めた自由学園全体の運営を任せられることになる。

また、委員の任期を大体2ヶ月としていた理由については、これまで確認してきたもと子のニースでの発言や『要覧』に書かれた内容等から考えると、自由学園に在籍するすべての生徒に対して在学中に自由学園の中核となる「学生委員」を複数回経験させるためだったと考えられる。

また、本科には、「学生委員」とは別の仕組みが用意されている。先行研究でも紹介されている「家族」⁽⁴⁴⁾である。この本科に設けられた「家族」は、一組の30人を5つの家族にわけ、それぞれが一つずつの家族として自由学園での生活や勉強を互いに助け合う。この「家族」は半年毎に変わるようになっており、「さまざまな人と自分を触れ合」⁽⁴⁵⁾を重んじていた。

さらに各組（学年）の毎日の生活には「リーダー」という責任者が存在する。組中の人が毎日交代で一人ずつリーダーとなり、リーダーは「その日その組の生活をチャンとした楽しいものにして行かなくてはなりません」⁽⁴⁶⁾と説明している。リーダーになった際には家に帰ってから勉強すること等の打ち合わせも含め、一日、自分が所属する組をコーディネートする役割を担う。『要覧』には、こうすることで「お互によき統率者であり、よき被統率者であり得ることを学びます。一家を治める心持と、一人の家

人として父母の支配の下に立つ心、社会の一員であり、またある時はその働き人であり得る修養も、そこからいろいろに発見」⁽⁴⁷⁾できると説明している。

以上が当時の「学生委員」及び「家族」の基本的な仕組みである。その年によって新たに加わるものや修正される内容等もあるが、当時の自由学園ではこの「学生委員」と「家族」が「自由学園の生活」をかたちづくる重要な要素となっていた。

「学生委員」の仕事は「用度の係より」、「実務の係より」、「食費の係より」といった項目で定期的に『自由学園月報』等にも掲載されている。実際に「学生委員」を務めた当時の生徒が「学生委員」の仕事をどのように受け止めていたのかについて、一例ではあるが確認してみよう。以下に用度を担当した生徒の文章を紹介する⁽⁴⁸⁾。

今月迄は校費を全部、事務所の方で管理して下さいましたが、今月からは、私共の手にお預りして、全く独立して用度のお仕事をして行くことになりました。

始めてのことでもあり、殊にお金を沢山手許にお預りすることは、本当に心配なことでございます。収支には十分に用心に用心して居りました。月末の決算も心配して居りましたが、ぴったり合いました時には、何とも言へない喜びでございました。用度係のお仕事は大体三つに分けました。学園中の必要品を買って来るのと、毎日消費して行く品々を調べるのと、食器の毀れ物の計算でございます。

用務を担当する生徒の言葉からは、初めて自由学園の運営に関わることに不安を抱きながらも、充実感とともに自分に任せられた仕事をより合理的に運用しようとする姿勢が読み取れる。また、学年単位等の小規模の運営ではなく、自由学園全体の運営を実際に生徒たちに任せており、自由学園が徹底して自治の環境をつくっていたことがわかる。同記事には、収入高

から支払高まで自由学園の一か月間（1924 年 10 月分）の校費収支が事細かく報告されている。

羽仁夫妻は「われわれの団体はまた一つの大きな家族のやうなもの」⁽⁴⁹⁾であると位置づけていた。もと子の「家族」論については、いくつかの先行研究において指摘されている⁽⁵⁰⁾。しかし、ここで重要なのは、『要覧』において「学科の方も実生活の方も、それだけ学園の勉強は決して楽ではないのです。」⁽⁵¹⁾と記しているように、創立期より自由学園が「家族」を最小単位とした、生徒の手による実生活（自由学園）の運営を重視し、それらを学科目と科外教育の連関によって展開するため、徹底した教育カリキュラムを構成していたという事実である。

特に「自由学園の生活」で書かれていた「学生委員」と「家族」についての内容は、生徒たちの「自労自活的」な生活を重視するとはいえ、自由学園という一つの社会を組織的に運営するために、個人以上に集団における合意形成の仕組みを重視し、それを実現するための組織論を重視したカリキュラムで構成されていたことがわかる。

また、本科（予科含む）と高等科で科外教育の内容を分け、「家族」の仕組みにみられるように、本科（予科含む）の学生が高等科へと学年が上がるにつれて自由学園という団体（家族）を運営する力がつくようにと考慮されたうえでカリキュラムが設計されていた点は興味深い。つまり、学科目と同様に科外教育についても、教育段階に応じてその内容を工夫し、しっかりと企図して展開していたのである。

以上のことから、自由学園教育の特徴は、卒業後の活動を視野に入れ、個人だけでなく団体で学校（社会）を運営することを企図したカリキュラム（科外教育と学科目の結合）にあったといえる。いいかえれば、それは個人以上に集団に重点を置いたカリキュラムであったということである。自由学園が集団での活動に重点を置いた理由は、これまで確認してきたように、卒業後の社会生活（活動）にこそ自由学園教育の目指す目標があったからである。だからこそ、徹底した集団運営のカリキュラムが構成され

たのだといえる。

また、本稿では、特に科外教育に注視したため、詳しく検討していないが、同『要覧』の三つ目の項目にあった「魂の成長のために」という、修養（キリスト教）について記した項目は自由学園教育の思想的側面を理解する上では重要な部分である。

この項目では、神と向き合うことの重要性とともに、自由学園において毎朝全員が一同に集まって朝の礼拝をすることが紹介されており、礼拝を通し、自分の魂の成長に伴って、また個々人によって変わる神の姿と向き合うことで、自由に成長する必要性を訴えている。

羽仁夫妻はそれこそが「信仰の自由」であり、「唯、人各々の中にある神に対する憧憬を、ひとり自ら思ふばかりでなく、礼拝といふ実行によって、本当に成長させられていくものであるといふことは、われわれの団体の奪ふべかざる信仰」であるとし、「自由学園のすべての生命の源泉」⁽⁵²⁾として位置づけている。先行研究でも指摘されているように、自由学園教育は、キリスト教を軸とした教育思想を前提としてその総体が形づくられていたことは押さえておく必要がある。

(2)『自由学園月報』を通してみる学科目と科外教育の結合

これまで確認してきたように自由学園の運営は「学生委員」を中心としながら、「夏休み報告書」や「夏休み報告会」（1924年～）⁽⁵³⁾、「生活表」⁽⁵⁴⁾等、自分たちの生活それ自体を自分たちで運営することができるような仕組みで構成されたものであった。

一方で、1924年より理科を担当していた和田八重造が自身の理科教育を「ドルトンプランに據る」⁽⁵⁵⁾ことにしたと発表するなど、山本鼎の芸術教育に限らず、新教育の中で注目されていた教育手法を取り入れた教育が自由学園の学科目の中にもみられるようになる。学科目に対する考え方は時期によって変化している場合があるが⁽⁵⁶⁾、実際にどのように学科目と科外教育が結合していたのだろうか。『自由学園月報』⁽⁵⁷⁾の記事から確認し

てみよう。

『自由学園月報』は「学校という団体にはまたその団体の報告がなくってはならない」といった考えから、学園の在学生やその家族、卒業生、教師、学園の関係者に向けて発行された新聞のような媒体である⁽⁵⁸⁾。

自由学園で英語を担当していた岡田哲蔵も指摘しているように、当時の自由学園の生活は教場のみだけではなく、生徒達が様々な活動をする「種々の会」が存在していた⁽⁵⁹⁾。また、科外活動の一環として行われていた「遠足」や「旅行」には、各学科目を教える講師も共に参加しており、自分が担当する学科目に限らずに生活のなかで生徒を指導していた様子が同史料から読み取れる⁽⁶⁰⁾。つまり、自由学園の学科目を指導していた講師たちは学園教育全体の指導者にもなっていたのである。代表的な事例として、1925年より始まった「学期末成績報告会」⁽⁶¹⁾がある。

7月6日から10日まで、合計5日間にも及ぶ日程で実施されたこの報告会の特徴は、その学期の学習成果を全校で聞き合うことにある。また、科目も英語や国語、理科というように通常の学科目名で分けるのではなく、「思想及び文章の会」、「自然科学の会」、「美術の会」、「英語の会」という名前にし、グループ分けをしている。『自由学園の歴史 I 雑司ヶ谷時代』においては、この報告会は1925年より始まったとされるが、実は、1924年の『自由学園月報』においても「英語会」(6月25日)、「自然科学の会」(7月7日)、「思想及文章の会」(7月8日)の実施を確認することができる⁽⁶²⁾。

同記事において、「英語会」や「思想及文章の会」では「初めての試み」であったことが記されている。また、「自然科学の会」では、「今学期の間に研究した題目についての発表会である」こと、本科から高等科までの学びの成果が発表されたことが書かれている。このことから、これらの会は1925年に実施された「学期末成績報告会」の前身のようなもの、あるいは報告会そのものが1924年より実施されていたと考えることができる。

「今学期の間に研究した題目」という言葉や予科の「今学期中に起った世界一的問題を新聞材料として研究した結果を発表した」という記述、ま

た、本科の「箱根山火山についての研究を発表した」という記述等にみられるように、同会の発表内容は必ずしも各科目で学んだ内容に限られたものでなく、また、学んだ内容であっても自分達の日常生活に関連する事柄を研究し、その成果を発表していたと考えることができる⁽⁶³⁾。

実際に、1925年に実施された学期末成績報告会の内容を確認すると、学期末試験のために準備するのではなく、「一学期に各学科から得た知識を、様々な方法で発表し報告する」ことに主眼が置かれていた⁽⁶⁴⁾。そのため、例えば「思想及文章の会」は1925年の『要覧』に記載された科目の通りであれば、「国語」と「哲学・文学」といった学科目を合わせた総称の会であり、各科目が「～の会」という名称になっていた理由もここにあると考えることができる。つまり、一つの科目の評価に留まらず、各分野を一つにまとめて取り扱うことで、自由学園総体としての学びを参加者全員で共有しようとしていたのである。

この学期末成績報告会には、各会に連なる学科目を担当していた講師たちも出席し、生徒達の発表を批評していた。まさに自由学園という一つの社会をつくる全員で学びの成果を確認し合う場であったといえるだろう⁽⁶⁵⁾。実際に、「思想及び文章の会」を事例として、当時の自由学園での学びを確認してみよう。会の担当者（講師）の一人である渡邊吉治は以下のように説明している⁽⁶⁶⁾。

本学園で国語と称する科目は、古義の註釈や字義の詮索を主とせず、美しい文章を味ひ、作り、正しい思想を理解し、思考することを主とする。本学期では、三宅先生が本科一年から四年までかけて、文章を教へられた。一略一本科五年と予科、高等科とでは、今学期は、主として思想的方面に力を用いた。思想的方面といつても、思想そのものより考方の方である。論理的思想 [本文ママ] でなく、論理的に思考する [本文ママ] ことである。これは一般に、文化的教養で女性が男性に目立って劣っている点の主要な一が芸術的にものを味ふことより

も、数理的にものを算へることよりも、論理的にものを考へることにあると考へたからである。

上記の考えから、科目の担当者が予科と高等科では波多野精一の「宗教哲学の根本問題」や阿部次郎の「人格主義」、「ギンデルバントの哲学概論」(ヴィンデルバントだと思われる)、西田幾多郎の「思索と体験」を使って授業を行ったと渡邊は説明している⁽⁶⁷⁾。そして、国語系統の科目を教える際に重視されていたことは、後にも述べるように思考することと、「個人」としての意思を表現することにあつた。

報告会では、初めに科目の目的と授業で読んだ本の説明をし、その後、各講師がこの学期中に生徒がつくった文章を選び、選ばれた生徒が自分の文章を読み上げるといった方式がとられた。渡邊は、全体の報告をみて「学園の生徒が何よりも真面目で熱心なので、そういふ方面の教養が眼に見えて発達して来たことがほんとに悦ばしい」とし、発表した生徒の何人かは「学園を代表する思索家たる資格があるとおもふ」としながらも、「いまは徒に自家の思想を強く[本文ママ]主張するよりも、他人の学説を正しく[本文ママ]理解することを教養の本分としている」ため、「いつかは、かゝる論理的の態度で自身の思想を発表し得るときが来ることと信ずる」として次なる課題もあげていた⁽⁶⁸⁾。

また、本科1年から4年までを担当した三宅淑子は、「今学期の各□の成績の中で、想のかたち、表現の筆致に於て特に勝れていたものといふわけだけでなく、何かしら個人の姿が(真正面から又は単なる試□としたものからでも)あらはされて居るといふ事を、標準として」(□は判読できない文字)全体の前で発表をする作文を選んだとしている⁽⁶⁹⁾。当然ではあるが、講師によって、また、担当する学年が異なることで重視する点が異なるのが興味深い。そして、そういった講師の意見や生徒達の学びを全体で共有することこそがこの報告会の醍醐味でもあったといえる。

『自由学園月報』には、予科や高等科の文章が紹介されておらず、本科

1年から4年までの限られた文章しか掲載されていないため、選ばれた生徒の文書をすべて確認することができない。さらに紙幅の都合で選ばれた生徒のタイトル全てを紹介することはできないが、例えば三宅が選んだ本科一年の「梅雨晴れ」や「昨日からの思ひ」等はタイトルからもわかるように生徒達が自分の日常生活を題材にして書いた文章であると考えることができる。

「梅雨晴れ」を書いた生徒の一文には、「学園の芝生のきれいな色を見て居ると一人でその緑の色の中へ吸ひ込まれて行く様な気がした」と梅雨明けの芝生の美しい情景が素直に表現されている⁽⁷⁰⁾。そして日常生活へのまなざしと自分の感じた情景をそのまま素直に表現することは、渡邊が掲げていた自由学園の「思想及び文章の会」の教育目的に沿った内容であるとともに、当時の新教育に共通する子どもの生活と個性を重視した教育法でもあったといえる。

「学期末成績報告会」は、一見すると単純な成績発表を連想させる名目ではあった。しかし、同報告会は、自由学園生活の一部として位置付けられていた。自由学園教育に関わるすべての人が学習成果を聞き合うことで、自由学園全体の学びの現状を参加者で共有する機会になっていたのである。そこには、自分とは異なる意見や価値観等を持つといった、人の多様性を全体で共有し、そこから次の課題を見つめ、新しいあり方を考えるといったことが期待されていたと考えることができる。なぜなら自由学園という教育機関を一つの社会として捉え、卒業後に社会活動を展開するためには、一つの集団を運営する際の視点や感覚、手法等を養う必要があるからである。

その意味において、『自由学園月報』等を通して自由学園での生活を掲載することは、生徒達にとって卒業生を含めた関係者（外部の協力者を含む）とどのように情報を共有し、行動に移していくかを学ぶ機会の一つとして位置づいていたといえる。また、卒業生を卒業後も自由学園の活動につなげる役割もあっただろう。

「自由学園創立十年報告会」で当時の「学生委員」も「学園は一つの社会をなしています。」と説明し、自分たちは「学園それ自身よき社会として存在し発達することを務めて」いる存在だと語ったように、もと子の主張と同様に自由学園それ自体が一つの「社会組織」であると同時に、生徒である自分たちもその一員であると認識していたのである⁽⁷¹⁾。

この創立期から続く、社会活動へのまなざしとカリキュラムの仕組みが、創立 10 周年のニースで発表された消費組合運動や工芸研究所、セツルメントや生活合理化運動等に代表される卒業生の「共同体形成型」をつくる社会活動へとつながっていったのである。

また、各科目を担当した講師たちも、同会に限らず生徒たちが企画する会に積極的に参加していた。繰り返しになるが自由学園にとっての講師とは、単に自分の科目だけを担当するだけではなく、生活面も含め、自由学園での学校生活全体にも関わる存在であったといえるだろう。それは、福原（2019）でも指摘したように、自由学園の講師を務めるということが、事実上、講師自身も一定程度自由学園という運動体の参加者の一人として加わることを意味している。

いいかえれば、新しい婦人を育成することを目指し、集団での社会活動の展開を目指した自由学園総体としてのカリキュラムは、企図された社会運動型のカリキュラムであったといえることができる。だからこそ、本稿で確認してきた「学生委員」のように徹底した科外教育の仕組みがつくられ、学科目と連関するように構成されていたのであり、創立期より集団による社会活動を展開する婦人の育成を企図してカリキュラムを展開していたことこそ、新教育運動における新学校としての自由学園教育の特徴であるといえることができる。

IV. おわりに

本論では、創立期（大正期）の自由学園の教育を学科目との連関を意識しながら、『要覧』や『自由学園月報』といった内外の史料を中心としつつ、

科外教育に焦点をあてることで、改めて創立期（大正期）の自由学園の教育内容の特徴を位置づけることを目的としてきた。

羽仁夫妻は社会改造を展開する教育機関を目指して自由学園を創立したため、その教育内容は生活と教育の連関を重視した内容となった。

確かに創立期の自由学園からドルトンプランや山本鼎の芸術教育といった、生活や個性を重視する新教育運動の思想と手法を確認することはできる。しかし、自由学園は子どもの個性や自発性の尊重をゴールにしていたわけではない。学科目も科外教育も卒業後の集団での活動を視野に入れてカリキュラムをデザインしていた。

卒業後を視野に入れてカリキュラムをデザインしたのは、自由学園を卒業後、個人としてだけでなく、団体として活動できる人材を育てることができなければ、自由学園の存在理由を果たすことにならないからである。言い換えれば、子どもの個性や自由を尊重するだけではなく、それらを束ね、集団となって新しい社会をつくっていく組織（運動体）を生み出すことを重視したのであり、それこそが羽仁夫妻や自由学園の生徒、そしてその関係者たちにとっての新教育運動だったといえる。

創立期の科外教育が「自由学園の生活」の軸となる「学生委員」や「家族」の構造に代表されるように細分化され、尚且つ組織的な運営を企図したかたちになっていたのは、もと子自身が自由学園での生活は「楽ではない」と表現していたように、徹底した生活へのまなざしと教育活動の展開による社会への働きかけがなければ新しい社会をつくることはできないという羽仁夫妻の強い意志があったからである。

その意味において、当時の自由学園は新教育運動のなかで科目や教育方法としての展開だけではなく、また、子どもの個性を尊重することにとどまるのでもなく、社会運動に特化したカリキュラムを構築し、展開した新学校であったと位置づけることができる。「飽和点」に達したとされ、1930年代に活発な展開を見せる自由学園の教育の土台には、本論で述べた創立期のカリキュラム展開の蓄積があったのである。

さて、本論にはまだいくつか課題が残されている。一つは自由学園の教育展開を昭和期も含め、通史としてみたとき、歴史的にどのように位置づけることができるのかという点である。個性を重視することと、一つの運動体として組織的に活動することを重視することは相反する性質を持つものでもあり、同時に昭和期、特に戦時下における自由学園総体としての教育展開の検討はほとんどされておらず、課題が残されている。

もう一つは新教育運動のなかで自由教育を展開した学校と称する自由学園の教育が果たして本当に自由教育といえるのか、いえるとしたら、それは他の新学校で展開された自由教育と何が違うのかということである。新教育運動における教育思想や教育方法は多数分類することができるが、「生活教育」や「自由教育」といった代表的なものについても、その位置づけについては、必ずしも整理されているとはいえない状況がある。特にもと子自身、「自由教育」については度々批判的な論評をしている。新教育運動における「自由教育」等の教育思想や教育方法を整理しつつ、自由学園の「自由教育」とは一体何だったのかを明らかにすることは、新教育運動研究に更なる厚みを加えることになると考えている。

注

- (1) 「羽仁氏創作の生活大学 自由学園の延長に」『教育週報』1934年5月12日 第469号 p.9 復刻版 第10巻 中野光監修 大空社 1986年。新しい教育機関として構想されたのは、タイトルにもあるように自由学園の卒業生をメンバーとする生活大学と男子のための七年学校（1935年設立：現男子部）である。
- (2) 福原充（2014）「新教育学校の創立基盤—自由学園を事例として—」『日本教育史学会紀要』第4巻 日本教育史学会 pp.20～47
- (3) 牛木純江（2013）「セツルメントにおける人間形成—東北農村生活合理化運動に注目して」『近代日本の人間形成と学校—その系譜をたどる』 木村元編著 クレス出版 p.207。なお、牛木は「『婦人之

友』は生活をつくり出す研究機関としての場（理論形成の場）であり、友の会・自由学園は、『婦人之友』で理論化され具体化された新たな生活を実践し、講習会などを通じて社会に広めつつ、そこで出てきた問題や課題を再度『婦人之友』に還流させる場として存在していた」（同頁）として、相互補完的な役割についてさらに一步踏み込んだ指摘もしている。確かに『婦人之友』が理論形成の場としての役割を担っていたことは筆者も同じ見解である。一方で、『婦人之友』での自由学園関連の記事や羽仁吉一の言説等を考えると、必ずしも『婦人之友』で理論化し、具体化した新しい生活スタイルを実践する場としての役割を自由学園や友の会が担う図式だったとはいえない部分がある。この三団体は羽仁夫妻を中心とする社会事業の実行機関として、相互に補完し合う関係性だったという評価が妥当なのではないかと筆者は考えている。

- (4) 小関孝子 (2015) 『生活合理化と家庭の近代 全国友の会による「カイゼン」と『婦人之友』』 勁草書房 p.45
- (5) 中野光 (1968) 『大正自由教育の研究』 黎明書房 p.206。また、中野は自由学園の特徴として、「中間市民階級の子弟にとって」といった限界はありながらも、女子教育機関として「労働の訓育的価値に対して積極的な評価を加えていた」点に注目している（同書、p.207）。
- (6) 斉藤道子 (1988) 『羽仁もと子一生涯と思想』 ドメス出版。なお、斎藤も「もと子の最大の功績は生活合理化にあると思っている」（同書、p.326）と指摘しているように、特に 1930 年代前半に自由学園の教育活動と連関しながら『婦人之友』、友の会等を中心に展開した生活合理化運動は、自由学園だけではなく、羽仁夫妻の事業として一つの到達点を迎えた重要な時期であったと考えることができる。
- (7) 同上、p.131
- (8) 前掲注 (6)、p.144。なお、斉藤は「社会改造を意図して自由学園をつくったわけではない」（同書、同頁）と主張しており、ニースで

- の講演内容に代表される社会改造への視点は自由学園での教育活動を通じて次第に深まってきたとしているが、筆者の立場は異なる。福原（2014）でも指摘したように、羽仁夫妻の社会事業の基盤には、矯風会会員としての活動の他、明治期からのキリスト教社会事業等の影響がある。自由学園を創立する以前から組織的に社会活動を展開した経験があり、尚且つ社会課題に取り組む志向がみられることから、筆者は社会改造を意図して自由学園を創立したと考えている。
- (9) 菅原然子（2016）「国民学校におけるカリキュラム実践モデルとなった自由学園初等部一昭和 16、17 年度来校者名簿の考察を基に一」『生活大学研究』Vol. 2 自由学園最高学部 pp.26～49
 - (10) 同上、p.33
 - (11) 福原充（2019）「自由学園のカリキュラムからみる教育内容についての考察（1）一創立期（大正期）に注目して一」『キリスト教教育研究』第 36 号 立教大学キリスト教教育研究所 pp.63～87
 - (12) 『自由学園要覧』自由学園 1925 年 p.10
 - (13) 前掲注（11）
 - (14) 『自由学園の歴史 I 雑司ヶ谷時代』自由学園女子部卒業生会編 婦人之友社 1985 年 p.98
 - (15) 「自由学園より」『婦人之友』第 17 巻第 6 号 6 月号 婦人之友社 1923 年 p.12
 - (16) 「卒業生近況」『自由学園月報』第 2 号 自由学園 1924 年 12 月 10 日 p.11。その他にも、同頁には、「自由学園卒業生会 U&I (Unity and Individuality)」と記された卒業生の名簿を確認することができ、準会員と既に亡くなった卒業生も含めた第一回卒業生 36 名、第二回卒業生 11 名、全卒業生の名前と住所（亡くなった卒業生は除く）が記載されている。「WEST・U&I の方達にも御目にかけました。」（同史料、p.12）といった記述もあることから、この時期、卒業生は卒業生会のような組織に全員加入し、卒業後においても卒業生同士

が交流できるような仕組みをつくっていたことがわかる。なお、同記事の個人名を記載することは本論では避けることにする。また、本史料における本文の踊り字は、本論が横書きのため、この形式にあうように筆者が修正して記述している。

- (17) 2 年生も含め、すべての学生が前向きな記述をしていたわけではない。家の中の雑用をする日々を送っているため、「もっと張りのある生活がしたい」、病弱で『自由学園月報』で学園の生徒の活躍をみると「羨しく存じます」等、自分が置かれている状況や現状に不満を持つ内容、『自由学園月報』の記事をみることで「『おばあさんになるまで勉強する筈であった』皆様とのお約束を思ひ出しました。」、「まだ何もせずぶらぶらしています。」といった記述も確認できる（前掲注（16）、pp.11～12）。
- (18) 前掲注（14）、p.99。「研究科」自体はあくまでも卒業生の組織であったと考えられる。
- (19) 前掲注（16）、p.12
- (20) 前掲注（11）、pp.72～73
- (21) 前掲注（15）、同頁
- (22) 『我が住む町』 自由学園 1925 年
- (23) 前掲注（14）、p.194。この二十一年生は在学時から自由学園消費組合の前身とされる「ダムショップ」を校内の一隅に開くなどした（同書、p.182）。自由学園では生徒達の意味を尊重した小規模な活動について、在学中から展開することを認めており、関係資料からいくつかその事例を確認することができる。
- (24) 前掲注（14）、p.194
- (25) 同上、p.200
- (26) 羽仁もと子（1932）『それ自身一つの社会として生き成長しさうして働きかけつゝある学校 沸国ニースにおける世界新教育会議講演』抜刷 発行年不明 p.9

- (27) 同上、p.10
- (28) 『婦人之友 別冊 家庭生活合理化』 婦人之友社 1932 年 4 月 1 日発行
- (29) 前掲注 (26)、pp.10～11
- (30) 同上、p.11
- (31) 前掲注 (14)、pp.404～405
- (32) 前掲注 (26)、p.11
- (33) 「座談会 教育と変化しつつある社会」『婦人之友』第 26 巻 第 6 号 6 月号 婦人之友社 1932 年 p.95。なお、座談会は新教育協会の座談会として企画されたものである。野口援太郎、志垣寛、赤井米吉等の新教育関係者他、国民教育奨励会理事、代議士等、16 名が参加したとされる。
- (34) 『図説 日本女子大学の八十年』 日本女子大学 1981 年 p.58
- (35) 羽仁夫妻の娘の説子は、日本女子大学付属の豊明小学校に通っていたため、羽仁夫妻も日本女子大学の活動について理解していたと考えられる。
- (36) 『大正の女子教育』 日本女子大学女子教育研究所編 国土社 1975 年 p.227
- (37) 前掲注 (14)、p.179、pp.188～191
- (38) 前掲注 (12)。なお、現在確認できる大正期の『要覧』には 1923 年（タイトルには『要覧』とは明記されておらず、『自由学園』というタイトルのみで、教育の特徴や学制、学則が紹介されている。本論では、学外に配布したと考えられることから、1925 年の要覧と同様の役割があったと捉え、『要覧』として位置付けている）と本論で使用している 1925 年のものがある（はじめてのパンフレットという記述は、前掲注 (14)、p.128 で確認することができる）。
- (39) 前掲注 (12)、pp.10～11
- (40) 同上、p.10

- (41) 前掲注 (12)、p.13。ここで紹介されている「会計」は、『自由学園月報』を確認すると「食費会計」または「食費」と明記されていることもあり、主に「食」関係の会計を担当していたと考えられる。なお、他の委員でも「用度会計 (主任)」と明記されることがあることから、「会計」という役割自体は他の委員にも存在していたと考えられる。
- (42) 前掲注 (12)、p.13
- (43) 同上 p.11。なお、1923 年の要覧などでも確認できるが、当初、学生委員は高等科に設けられた制度であり、本科は委員を担うことはなかったようである (『自由学園』 自由学園 1923 年 自由学園資料室保存資料 p.2)。全校規模の委員会が発足し、「学園生活の自治と運営の責任を委せられる」ことになったのは 1923 年からであったとされる (前掲注 (14)、p.103)。また、1927 年からは、生徒の発案から、これまで委員の中で互選していた委員長を全校生徒の選挙によって選ぶことになったことや、委員とは別に各組 (学年) のリーダーが互いに連絡をとり、協力することを目的としたリーダー会議がはじまったことが記録に残されている (前掲注 (14)、p.178、p.183)。
- (44) この家族についても親友といった、特定の人物との関係性だけではなく、「すべての人とよい交わり」をすることが目指された (前掲注 (14)、p.103)。メンバーが変わる際にはいろいろな問題が起きるため、1923 年より週一回の家族会議 (昼食後 30 分間の掃除の時間に交代で一家族ずつ集まる) の時間がとられ、お互いに思うこと、感じることを語りあったとされる。自分達で解決できないときは、もと子が助けに入ったという (前掲注 (14)、p.103)。
- (45) 前掲注 (12)、p.12
- (46) 同上、p.13
- (47) 前掲注 (12)、p.13
- (48) 「用度の係より」『自由学園月報』 第 2 号 自由学園 1924 年 12 月 10 日 p.6

- (49) 前掲注 (12)、p.14
- (50) 前掲注 (6) 他、多数。
- (51) 前掲注 (12)、p.14
- (52) 同上、p.16。本論においてはもと子の教育思想と神の関係性について検討しないが、近年では、羽仁もと子の教育思想における神の理解を検討した研究成果も出てきている（相田まり（2018）「羽仁もと子の教育思想における神の二面性について」『研究室紀要』第44号 東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室 pp.39～48 他）。
- (53) 前掲注 (14)、pp.126～127。なお、夏休み報告書はもと子の提案によりはじまった。その後、これらの活動は継続的に実施されるものとなった。
- (54) 同上、pp.160～161。「生活表」とは、個人・家族・クラス（学年）単位で自分達の生活（起床～就寝、健康状態、勉強の状況等）を記録・集計し、可視化するための表のことである。家族リーダーは集計をし、クラスリーダーに報告。クラスリーダーはその数字を集計してパーセントを出し、副委員長に報告。副委員長は礼拝の後で全校の状態を報告する。毎日の報告によって団体生活の自覚を深めることを目的とした。
- (55) 和田八重造（1924）「今学期における理科の成績」『自由学園月報』第1号 自由学園 9月10日 p.2
- (56) 二十一年生が初めて高等科の生徒になった際には、本科5年間で学んだことの上にたって、より深く、やや専門的に学問や技術を学ぶために、3部にわかれて勉強するようになったことが記されている。ちなみに、1部は「経済・理科」、2部は「英語」、3部は「洋裁・美術」である（前掲注 (14)、p.160）。
- (57) 『自由学園月報』は自由学園で初めて創られた月毎に配布される報告書である。自分達の教育成果を学習の一環として新聞形式で発行するのは自由学園の教育によくみられる特徴である。この他にも

- 『The Gakuen Weekly』(1926年12月6日～1933年10月13日)や『学園新聞』(1931年7月1日～)等がある。今回は大正期に注目したため、『自由学園月報』を使用した。また、『The Gakuen Weekly』の概要については、岸本の成果がある(岸本苑子(2016)「The Gakuen Weekly 概論」『生活大学研究』Vol. 2 自由学園最高学部 pp.91～100)。
- (58) 羽仁もと子(1924)「月報のはじめに」『自由学園月報』第1号 9月10日 自由学園 p.1
- (59) 岡田哲蔵(1924)「学園に手伝ひて」『自由学園月報』第1号 9月10日 自由学園 p.1。具体的には「文芸会」や「カント記念会」等がある。これらは基本的には生徒達が企画と運営をしていた。その他にも「音楽部」や「運動部」、「図書部」などもあった。これらは学生委員とは別に各クラスから適当な人が委員として選ばれ、運営にあたることになっていた。
- (60) 岡田哲蔵(1924)「旅行感想の分類に就て」『自由学園月報』第2号 自由学園 12月10日 p.8。同記事において、岡田は「心理研究の実験」にもなるとして、高等科2年に指示し、全学年の旅行の感想を分類した一覧を作成している。
- (61) 前掲注(14)、p.142、pp.152～155。会の発表は一日毎に実施され、5日目は本科2年生と3年生の希望によって、この学期で読んだ小公子と青い鳥の劇と対話を皆がみたという。そして、6日目に終業式を迎えるというスケジュールであった。スケジュールは次の通り。1日目自然科学、2日目英語、3日目思想と文章、4日目美術、5日目劇(2年小公子、3年青い鳥)(同書、p.142)。
- (62) 『自由学園月報』第一号 自由学園 1924年 p.5
- (63) 同上、同頁
- (64) 前掲注(14)、p.152
- (65) 同上、pp.152～155

- (66) 渡邊吉治(1925)「論理的思考」『自由学園月報』 第4号 自由学園
9月10日 p.1
- (67) 同上、同頁
- (68) 前掲注(66)、同頁
- (69) 三宅淑子(1925)「個人の姿」『自由学園月報』 第4号 自由学園
9月10日 p.1
- (70) 「梅雨晴れ」『自由学園月報』 第4号 自由学園 9月10日 p.1
- (71) 「自由学園の生活体系(創立十年報告会で学生委員の読んだもの)」
『婦人之友』 第25巻第7号 7月号 婦人之友社 1931年 p.85

(立教サービスラーニングセンター・JICE 研究員)